令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立ひまわり特別支援学校 ）　　学校番号　３０１　　【様式】

目指す学校像	子ども一人ひとりの可能性を伸ばし、自立と社会参加を目指した力を育む学校
重点目標	１　個別最適で一貫した指導の充実（学力向上） ２　安心・安全な学校生活のための教育体制や環境の整備（安心・安全） ３　学校と家庭、地域、関係機関と連携・協働した学校づくり（地域とともにある学校づくり） ４　特別支援教育の専門性を向上し、チームで取り組む人材育成（教職員の資質向上）

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和６年２月７日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	学力向上 （現状） ○個別の指導計画を踏まえた指導を行っている。学校課題研究では、「１２年間を見据えた系統的・継続的な指導の充実」を目指し ICT の具体的活用について取り組んでいる。 （課題） ○学校課題研究をさらに推進させ、個別最適な学びを充実させるための具体的な ICT の活用に取り組む必要がある。 ○知的障害教育部門高等部の開設１年目として必要に応じて教育内容の修正をする必要がある。	・個別最適な学びにおける ICT の活用の工夫と校外への発信をする。	①ICT 活用事例報告会を行い、児童生徒の実態に応じた効果的な活用方法を検討する。 ②２月に研究発表会を開催し、さいたま市及び県内特別支援学校へ授業実践及び ICT について発信する。	①教員の自己評価において、関連項目の肯定的回答の割合が 95%以上となったか。 ②研究発表会を開催し、研究成果を校外へ情報発信することができたか。	①教室内に設置されたプロジェクターを有効活用し、日常的に ICT を活用することができた。また、児童生徒の個に応じたスイッチの活用が進んだ。関連項目の教員自己評価の肯定的回答１００％であった。 ②２月９日の研究発表会に向け、さいたま市及び県内特別支援学校へ授業実践及び ICT について発信するよう綿密な計画を進めている。	A	・市教委の委嘱を受けた学校課題研究が今年度で終わりとなるため、その成果と課題を明確にし、次年度の教育活動を更に充実させるよう検証していく。	・意思の表示や選択するための方法の一つとして、ＩＣＴを有効活用しているところに感銘を受けた。 ・知的障害教育部門の生徒と学生とのお茶会を通しての交流は、お互いにとって良い効果があるので、引き続きお願いしたい。
		・知的障害教育部門高等部の開設１年目として教育内容の修正を行う。	①教育課程検討委員会を学期に１回以上実施する。 ②知的障害教育部門高等部において教育内容の修正を図る。	①教育課程検討委員会を各学期１回以上実施することができたか。 ②教育内容の改善点を基に年度末までに次年度の指導計画を作成することができたか。	①教育課程検討委員会を各学期に１回実施し、成果を共有するとともに、課題について修正をすることができた。 ②知的障害教育部門高等部において、教育内容の修正を図ることができた。特に職業教育等のための関係機関との連携を強化することができた。	A	・次年度、知的障害教育部門高等部が開設２年目となるため、２年生の教育内容の修正を強化していく。	
2	安心・安全 （現状） ○学校全体で事故防止に努めている。ヒヤリハット事案については必ず全教職員で情報共有をしている。 ○主治医と連携しながら安全な医療的ケアの実施を行っている。 （課題） ○安全で健康な生活を送れるように教育体制と環境整備を進める必要がある。 ○児童生徒の状態に応じた組織的な教育支援体制のさらなる充実が必要である。	・考え得るリスクについて未然防止を行う。	①ヒヤリハット事案の蓄積と分析により検討した対応策を全教職員で情報共有する。 ②毎月の校内の安全点検を実施するとともに、発見した危険個所については迅速に対応する。	①ヒヤリハット事案を分析し、検討した対応策を全教職員で情報共有することができたか。 ②安全点検で発見したすべての危険個所への対応を行ったか。	①ヒヤリハットの事案について毎回、情報共有を図ることができた。また、事案についてデータ化することでヒヤリハットが起きやすい時間帯等の分析を進めることができた。 ②安全点検で発見したすべての危険個所への対応を行うことができた。	A	・引き続きヒヤリハットや想定されるリスクを情報共有することで、事故の未然防止を図っていく。	・ヒヤリハット案件をデータ化することで、事故等が起こっている時間や場所の傾向を意識することができる。また、個の責任にせずにチームで考えている部分を今後も継続してほしい。 ・主任会を継続して行うことで児童生徒の情報共有が図れていると感じる。今後も大切にしてほしい。
		・児童生徒一人ひとりの状態に応じた組織的な教育支援体制の充実を図る。	①年間３５回の主任会を実施し、全校児童生徒一人ひとりの状況及び支援に関する情報共有を行う。 ②必要に応じて関係機関と連携を図るとともに、各学期１回以上の校内支援委員会を実施する。	①主任会を計画的に実施し、児童生徒に関する情報共有ができたか。 ②校内支援委員会を各学期１回以上行い、情報共有及び支援の検討を行うことができたか。	①主任会を計画通りに実施し、児童生徒の健康状態を中心に情報共有を図ることができた。（３２回　２／７現在） ②校内支援委員会を各学期１回以上行うことができた。児童生徒の個に応じた対応に向け、情報共有及び支援の検討を行うことができた。	A	・引き続き児童生徒の安心・安全な教育活動の充実に向け、報告・連絡・相談・見届けを密にしていく。	
3	地域とともにある学校づくり （現状） ○学校運営協議会において、学校、家庭、地域との連携・協働について熟議を行い、挨拶運動や作品展等の新たなかかわりをつくった。 （課題） ○地域資源を活用した教育活動の充実を図るために、地域との連携・協働体制の整備が必要である。 ○地域の特別支援教育の充実のために、本校の取組について情報発信の更なる充実が必要である。	・学校運営協議会でビジョンを共有し、地域との連携・協働について考える。	①学校運営協議会において、ビジョンを共有し、学校、家庭、地域との連携・協働について熟議を行う。 ②地域における新たな連携先または連携方法を開拓する。	①学校運営協議会の共有ビジョン、連携・協働内容について、多様な情報ツールを用いて校内外に周知することができたか。 ②地域における新たな連携・協働体制を構築することができたか。	①学校運営協議会で熟議を行い、「学校・家庭・地域で連携してできる取組」というテーマで、連携・協働し挨拶運動や作品展のご協力をいただくことができた。その内容を HP や学校だよりで周知した。 ②今年度新たに、ひまわり祭において、地域の方にボランティアとして参加していただいた。	A	・引き続き「学校・家庭・地域で連携してできる取組」をテーマに学校・家庭・地域・関係機関が協働できるようにするとともに、児童生徒からの協議会への発信も検討していきたい。 ・引き続き交流及び共同学習の充実を図っていきたい	・学校運営協議会で話題になった、作品展への出品、学校行事への参加協力等、積極的に地域との関わりが出来ていた。 ・地域支援ネットワーク等を利用して、地域の施設を積極的に活用してもらえると力になれることがあると感じる。
		・学校の取組や特別支援教育についての情報発信に努める。	①各種通信や HP 等について学校の教育活動等の取組について月１回以上情報発信する。 ②特別支援学校のセンター的機能を発揮し、特別支援教育に関する情報発信を行う。	①保護者アンケートにおいて、関連項目の肯定的回答が 95%以上となったか。 ②小・中学校等合計 15 校以上に対してセンター的機能による支援を行うことができたか。	①学校だよりや学部だより、HP で本校の教育活動ににについて情報発信した。関連項目の保護者評価の肯定的回答１００％であった。 ②特別支援学校のセンター的機能において、市立小・中学校に２５０件以上の支援をすることができた。	A	・引き続き、学校の情報発信に努め、特別支援学校のセンター的機能を充実させ、地域貢献を行う。	
4	教職員の資質向上 （現状） ○市教委の研究委嘱を受け、ICT を活用した授業研究及び事例共有に取り組んだ。 ○今年度から、肢体不自由教育部門と知的障害教育部門の併置校となった。 （課題） ○教職員が肢体不自由と知的障害の２つの専門性を向上させる必要がある。	・特別支援教育の専門性の向上に向け、学び続ける教員を育成する。	①教職員一人ひとりが、自分の特別支援教育の専門性の状態について把握し、強みを発揮し、主体的に専門性の向上に努める。 ②市教委作成のキャリア振り返りシート、研修受講履歴等を活用して、個人の課題に合った対話に基づく研究推奨を行う。	①教職員が特別支援教育の専門性について、自らの強みや課題を把握することができたか。 ②教職員一人ひとりが自らの課題意識に基づき、研修を受講することができたか。	①教員が、特別支援教育の専門性の状態を把握するシートを記入することで、自身が専門性の状況を自己理解できるようにし、主体的に今後の専門性向上について考えられるようにした。 ②校内研修を充実させるとともに、キャリア振り返りシート、さいたま市教育委員会教職員研修一覧、研修受講履歴を活用して、個人の課題に合った対話に基づく受講の推奨を行った。	A	・引き続き、教員が肢体不自由と知的障害の２つの専門性をもてるようにしていく。	・保護者・教職員アンケートともに、全ての項目で高評価となっている。これも、チームワークで取り組まれている結果だと感じる。引き続き、チームワークを大切に取り組んでほしい。